

マンガは、どこへ行くのか

— 子ども文化、

サブカルチャーのゆくえ —

伊藤 剛さんに聞く



伊藤 剛（いとう・ごう）

一九六七年生まれ。マンガ評論家。東京工芸大学芸術学部マンガ学科准教授。おもな著書に『テヅカ・イズ・デッド』（NIT出版）『網状言論F改』（共著・青土社）など。昨年は本誌にマンガ評を連載。幼時に愛読した祖母の蔵書中の異聖歌編『新美南吉全集』で強い印象に残っている短編が「久助君の話」であったと、今回の会場となった日本児童文学者協会事務局で判明。「日常の空間で感じているリアリティを疑わせるような話」が好きになった原点がこの物語ではないかという。

「ローティーン文化」の消滅

たとえば「本来は子どもの文化であるマンガを、大人も読むようになった」という言い方が成立しなくなったのは、いつごろでしょうか。この問いには二つの意味があります。ひとつは、マンガが大人をターゲットとすることが当然のことになったのはいつからか、ということ。もうひとつは、かつてマンガがマーケットにしていた子ども層の数が少なくなり、閾値を越えたのがいつか、ということ。たとえば二〇〇〇年代後半には、十二歳の子ども人口が、八〇年代の約六割にまで減少しています。

七〇年代にマンガ、あるいはサブカルチャーと言ったと